



平成20年度 郷土資料館特別展

「ジョセフ・ヒコ」

播磨町で生まれた「新聞の父」ジョセフ・ヒコが
1858年にアメリカの市民権を得てから、今年で150周年となります。

④ 長崎での活躍

今月は、ジョセフ・ヒコの長崎での話をしましょう。
長崎では「十六番館」に住んでいました。



▲今の「十六番館」。明治の面影が見えます

【ヒコ・クイズ】 この家はなぜ「十六番館」といわれるのでしょうか。

- ① 居留地の中で十六番目に建った家だから
- ② 居留地の番地をそのまま家の名にしているから
- ③ 居留地へ十六番目に移ってきた人の家だから

横浜に6年間いた後、1866年、長崎にいる友人が帰国するにあたって、長崎の会社の事務をジョセフ・ヒコに依頼しました。ジョセフ・ヒコは、横浜での身の危険を避ける良い機会と思ったのか、それまでの新聞の発行もやめて、長崎に住まいを移します。

長崎での住まいは、グラバー邸で有名なグラバー氏の土地にある家になることになりました。急なオランダ坂の北側にあり、海がよく見える場所です。ちょうどグラバー邸から谷をはさんで、北東向かいの丘の上になります。

さて、この家が「十六番館」といわれるのは、その居留地の地番が「十六番地」だからです。今も近くには「十二番館」や、「東山手洋風住宅群」があります。

ジョセフ・ヒコの長崎での事業は、グラバー氏と鍋島家とをつなぎ、高島炭坑の共同経営を成功させたことや、熊本城の保存に尽力したことなどがあります。このような落ち着いた長崎での生活は、数年で終わり、次は神戸へ移ります。

今、グラバー邸のすぐ北東向かいに「十六番館」が移築されて残っています。ただ、この家は「十六番地」にあった家ではありませんが、ジョセフ・ヒコが住んでいた家がつぶれた後に建てられた家といわれています。

それでも、当時の雰囲気は今に伝わってきます。

(郷土資料館 田井恭一)



クイズの答

- ② 居留地の番地をそのまま家の名にしているから

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079 (435) 5000

絵ものがたり『ジョセフ・ヒコと洋式帆船の男たち』(播磨町ふるさとの先覚者顕彰会) 発売中2,500円

町の人口 6月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,316人(+19人)	男...16,831人(+15人)	世帯数...13,336(+11)
	女...17,485人(+4人)	

